平成 30年　1月　22日

研修報告書

氏名：運﨑　愛

所属：信州大学医学部附属病院　遺伝子医療研究センター

研修期間：平成　29年　11月　27日　～　平成　29年　12月　22日

研修場所：東京女子医科大学附属遺伝子医療センター

研修内容：



研修成果：

1. 陪席

　遺伝カウンセリングのみではなく、神経疾患を中心として診断・診療・フォローアップも行われており、クライエント・患者さんを総合的に支援する体制が整っていると感じた。また、相談内容に応じて適宜、臨床遺伝専門医、認定遺伝カウンセラー、臨床心理士がそれぞれ説明や声掛けをされており、連携のとれた体制であると感じた。

　施設の特色により経験できる症例は異なるので、他施設に研修に行くことで自施設では経験できないような症例も陪席することができて貴重な経験であった。今後の診療に活かしたいと思った。

1. 遺伝学的検査

　今回は医学生の実習を見学するという形で参加させていただいた。脊髄性筋萎縮症の遺伝学的診断方法として、MLPA法を用いたSMN遺伝子コピー数解析とPCR-RFLP法を用いたSMN遺伝子欠失解析を見学した。それぞれの検査法は何を調べておりそれにより何がわかり、何がわからないのかということを理解することができた。また、今後小児科医・遺伝カウンセリング担当者として検査を提出する立場にあることを考えると、どのような過程を経てその結果が出されているのかという検査の概要は十分に知っておくべきことであるので、貴重な経験となった。

1. カンファレンス

　月曜日の朝のミーティング、水曜日の昼の初診カンファレンスに参加した。短時間で簡潔にプレゼンテーションとディスカッションが行われており非常に有意義であった。

1. その他

　小児科医、産婦人科医、糖尿病内科医、血液内科医など複数の診療科の医師が遺伝子医療センターでの診療に関わっており、様々な症例の陪席をさせていただいた。また、MODYや遺伝性溶血性貧血についてレクチャーを受けたりと非常に勉強になった。

週に1回抄読会があり、短時間で簡潔にプレゼンテーションされていた。最終週に担当させていただいた。

その他（感想・要望・反省点、等）：

　4週間という、ある程度長期間の研修期間であったため、徐々に慣れることができ落ち着いて研修することができた。通常の勤務体系では4週間もの長い期間見学・研修に行くことは難しいかと思われるので、このプロジェクトならではの利点であると実感した。

　研修期間中、私の他にもインテンシブコースの医師など多くの方が研修に来られ、多くの研修生が出入りする中で日常的に診療が行われており、研修生を受け入れ、指導するという土壌が自然に定着しているのだなと感じた。